

「南北首脳会談」

2018年04月30日

4月27日、韓国の文在寅大統領と北朝鮮の金正恩委員長の歴史的会談が行われた。朝鮮半島と世界に平和をもたらす会談として、後世、位置づけられるものになってほしいと心から願う。両首脳が手を取り合って微笑んでいる姿は、砲弾を撃ち合う演習シーンや火炎を残して空に消えるミサイル発射の映像とは比べられないほど、美しく、嬉しい。

朝鮮戦争は1950年に北朝鮮からの攻撃で始まった。東西冷戦の「代理戦争」であったが、同じ民族が血で血を洗う過酷な戦争であった。1953年に、38度線の「板門店」で「休戦協定」が結ばれた。以来、韓国と北朝鮮は激しい敵対関係にあった。今まで、金大中元大統領と盧武鉉元大統領が北朝鮮を訪ね、南北の和解を模索したが実らなかった。今回金委員長は、板門店にある韓国側にある「平和の家」で会談するために軍事境界線を越えて来た。二人の首脳は感慨深いものがあつたであろう。

私は韓国に行った時、板門店を訪ねた。軍事境界線を越えることはなく、緊張し切った北朝鮮の兵士の顔を見ないようにと言われた。会談する部屋の床に南と北を分ける線が引かれ、中央にある机をぐるっと回って、数メートルながら、北朝鮮側を歩いた。

軍事境界線を越えて来る金委員長を迎える式典は民族的に演出され、見る者の目を惹きつけた。つい数か月前は、今にも戦争が起こりそうな緊迫した状態であった。北朝鮮の暴走か、米軍の攻撃かと案じられた。そうなると、朝鮮半島は火の海になる。米軍基地を持つ日本も戦禍に見舞われる。それが、一変する状況になった。

韓国で平昌オリンピックが開催されるのを機に、文大統領が北朝鮮に参加を呼びかけた。それに応じ、選手団、応援団、芸術団が送り込まれ、更に、北朝鮮の政治的リーダーたちもオリンピック観戦に来た。両国の関係者は交流を深め、首脳会談の実現となった。文大統領の南北融和を求める姿勢は一貫している。彼は韓国の民主化に熱心で、リベラル派の旗手である。彼の功績は計り知れない。

一方、金委員長の変節には驚く。叔父を粛清し、兄を毒殺したと言われている。「金王朝」への絶対的忠誠を強要し、体制にそぐわない者たちを収容所に送り、人権を顧みない恐怖政治を行っている。また、世界の世論を無視して、核兵器を作り、ミサイル開発に熱を上げ、米国批判の言葉は凄まじいものであった。それが、一転して「平和の使者」を演じたのだから、本当だろうかと誰もがいぶかるのは当然と言えよう。しかも、再三裏切られた経験がある。しかし、彼の変節を信じたい。同行した人々は北朝鮮の最高実力者たちであり、あれだけ、世界のメディアに公表したのであるから、偽りの演出とは言えまい。とにかく、「休戦協定」を終戦、更に「平和協定」に変え、南北が平和に向かって歩みたいという意味は確かではないか。韓国では金委員長を信じられないと反発する人々もいるが、多くの国民は平和を望んでいることは間違いない。「平和協定」は、両国だけの問題ではなく、米国、中国の同意が必要である。更に、核問題は世界の平和に関わっている。米国は核の所有を断じて認めない。両首脳は「板門店宣言」で、「非核化」を謳っているが、その道筋は明確ではない。これから「米朝首脳会談」が行われる。そこで、どのような話し合いがなされるのであろうか。非核化は即座に達成されない。米国は忍耐して、向き合ってほしいと願う。日本は拉致問題がある。韓国や米国に拉致被害者を返してほしいと頼むだけでなく、「日朝平壤宣言」に沿って、国交を回復する政治的手段を講じるべきではないか。